

進行は氣まぐれで時にはバリに向つて進んで行つたものすらあるのである (p. 166)。亦在來大恐怖は到る所時を同じうして爆發したと人は斷言する。而して之も今日研究の結果誤りなる事が明らかとなつたとその性格が極めて複雑である事を實證的に論述する。

結局叙上の如き發火點に到達せる社會不安は偶發的事件によつて爆發したのであり、始源的恐怖は市から市へ村から村へと傳へられ、皆恐怖におびへ、武裝して立ち上つたのでありその全國的傳播が、大恐怖を形成した。

「二つの始源的恐慌は貴族の陰謀に對する平民の反撥と密接な關係に於てあつた、だからして佛蘭西の政治的狀態と結びつけられるのである……」(p. 168)「他の地區に於ては恐怖の起源に見出したのは經濟的事情だから流浪人の恐怖である……」(p. 169)は著者の史觀を物語つて餘あらう。

最後に Lefebvre は繰返して「此の『大恐怖』起源の中に何等の陰謀の根跡はなかつた……」(p. 170)事を強調し更に「此の恐怖の反動は農村に於ては殊に貴族階級には不利益になる方向をとつた。農民を集合させる事によりその反動は農民に自己に對する自覺を興へ封建制度を破壊しつゝある攻撃を強化した……、かくして大恐怖が注目を引く價值があるのは唯に奇妙な又繪の如き性格であるに止まらない。大恐怖は八月四日の夜を準備する事に貢獻した。而も此の資格で大恐怖は我々國民の歴史の最も重要な挿話の數に入るのである」(p. 247)と結論する。

Lefebvre は其實證研究により本書に於て極めて手際よく農民を主體とする革命の發端史を敘述したのであり、彼が二年後 Cahiers de la Revolution No. 1 (1934) の卷頭論文「佛蘭西革命と農民」に於て「佛蘭西革命は複雑なる事實である事、唯一の革命ではなく數多の革命がある」事を強調し「在來の(研究の)描寫は全然完全なものでもなければ忠實なものでもない何故ならば農民が云はば一向それに登場せしめられてゐないからである……」と慨嘆し「その起源に、その經過に、その傾向に、關してそれ獨得の自治を所有する農民革命が存する事である……」と (p. 12) 佛蘭西革命の框の内に於て發展した農民革命の重んずべき事を絶叫するに至つた母體を本書に見出す事が出来るのである。

とまれ在來の革命史研究がブルジョワを以て唯一の革命の荷擔者として議會中心主義の歴史であつたのに比し革命と云へば流血慘事を思ふ、暴力・民衆の武裝・暴動・を主題として革命を考へるに到つた功績は大きく、殊に農民なる新分野を革命史に開拓した業績は不朽である。

紹介するには既に舊くなつた本書も其所説は依然として新しく革命史研究の前途に不滅の光明を投ずるであらう。(Paris. Armand Colin 1932 邦價約四圓) (豊田 堯)

世界地理

石田・武見・渡邊編

世界は今や一大轉換期にある。過去數百年に亙り利己主義と暴

力と僞隣とを以て世界を覆つて來た舊秩序を打破し、代つてあらゆる民族に幸福と發展とを齎らす新秩序を樹立せんが爲の戦ひは地上至る處に於て或は既に戦はれ又は將に戦はれんとしつゝある。かゝる時期に際し、ひとへにまづ要求さるべきは世界の正しい地理的認識にあることは云ふを俟たぬ。所謂「日本世界の確立にもまづ正しき世界觀の抱持が前提となる。これなくして何の八紘一宇ぞや。今や地理學の使命たるもの誠に重且つ大なりと云ふべきである。この時に當り、この目的を達せしめんが爲に我國地理學界の中堅として知られた石田龍次郎、武見芳二、渡邊光三氏の責任編輯によつて學界の諸氏を動員し、「世界地理」全十六卷が刊行さるゝこととなつたのは誠に時宜を得た企として賛意を表せざるを得ぬ。

本書には幾多の特色があると信するが、まづ第一は全體の構成である。從來のかゝる出版物を見るに概して東亞に粗略に、歐米に詳細な感少ならず、甚だ遺憾であつたが、本書では全十六卷中東亞篇として十卷を宛て、ある。即ち日本及び滿洲にそれぞれ一卷づつ、支那に三卷、外南洋に二卷、シベリヤ・印度・西亞、及び濠洲・太平洋諸島・南極地方にそれごとく一卷づつの配分となつてゐる。従つてこの『東亞』とは狹義のものたらずして恐らく日本世界の發展力が直接に光被する地域を意味するのであらうが、この點にまづ編輯者の意圖の壯とすべきものを見るのである。この結果歐洲篇は四卷、アメリカ篇は二卷となつてゐるが、かくしてこそ興亞の中心日本で刊行される地理書と云ふべきである。

さて最近その第一回配本として「外南洋篇I」が手許に届いたので、以下簡単に一瞥しよう。本卷は三篇より成つて居り、まづ武見氏が外南洋の『地理的意義』として全體の五分の一の頁を費して各方面から縱横に論じ、次に『自然環境』として地體構造(坪谷幸六氏)、氣候(岡田武松氏)を説き、更に『島誌』としてジャワ、田中館秀三氏)、スマトラ・ホルネオ(鹿野忠雄氏)、セレベス(田中博野氏)、モルッカ・小スンダ(帷子二郎氏)、フィリッピンの自然(鹿野氏)、同人文(武見氏)の諸篇がある。この構成は全卷を通じて一貫されるらしい。殊に最初に該地方の『地理的意義』があつてその世界及び日本に對する關係を中心に説かるゝのは適當である。たゞ『島誌』の部分では著者により書き方の一定せぬ感みがあるが、これは、地誌敘述の方法の確定せぬ現在では已むを得ぬであらう。本卷を通讀するに名所案内記的のものに墮せず、よく學問的香氣を漂はせ、而もかなり一般人にも讀み易く書かれてゐる點は賞讃されてよい。更に評者が特に嬉しく感じたのは、前述の眞に日本を意識し、日本の世界的發展、舊秩序打破に對する熱意が諸所にみられたことである。例へば「外南洋の土着民族は白人の羈絆から逃れんと欲しつゝ、も實力の差は從來餘りに大であつた。然し暴力と僞隣を以て終始した白人植民國の統治は何らかの契機を以て破綻するのは必然で、好むと好まざるとに拘らず地圖は塗りかへられる途上にある」(二二頁)。或は「熱帯は元來文化人の野外勞働に不適乃至不可能なりとは實は白人の爲にする遁辭、僞證である。白人が彼等の優位を保持する爲の僞裝である。日本人の

熱帯労働の能力は比島のダヴァオに於ける四十年來のマニラ職栽培の成功が之を語る(六十七頁)など説いてゐるのは十分首肯出来る。今や歐洲戦争の進展に伴つて南領東印度の運命が注目的となつてゐるとき、第一回配本として此の地方が選ばれたのは好都合であつた。本書を讀むものは同時にその裏に白人國の植民政策の眞髓が何であるかを常に考へねばならぬ。なほ附録として詳細な各種統計表や索引がついてゐることは編輯者の學的良好の現れとして敬意を表する。(河出書房、一冊參圓五拾錢)〔別枝篤彦〕

外蒙人民共和國

——ソ聯極東の前衛——

三島康夫 共著
後藤富男

今秋の讀書期は蒙古に關するものだけでも數種の上梓を見た。一瞥しても翻譯ではラルソン「蒙古風俗誌」、カリニコフ「外蒙古」、ギルモア「蒙古人の友となりて」、著述では東亞問題研究會「蒙古要覽」、一寸範圍は異るが淺野利三郎「亞西亞民族の新研究」等誠に活氣に充ちてゐる。翻譯物は一流學者が蒙古に腰を落着けて研究執筆したものに獨創性、深み、整然さを見るが、その内容には執筆者が外國人である爲に、所により窺ふべからざる主觀性が覗いたり、執筆時が多く一九三〇年以前である爲、今日吾國民の直接的な政治的、軍事的資料としては不十分な點なしとしない。従つてこの後者をも要望する向には前記の「蒙古要覽」や此「外蒙人民共和國」が讀まれねばならない。蒙古要覽がその要覽と

しての性質上、内蒙、外蒙のエッセンスを記録してゐるに對し、本書は外蒙古だけで一書を成し、鮮明を缺くとは云へ三十餘の圖版、地圖を有するので外蒙古の理解は非常に容易である。著述上の文獻に關しては最後の頁に「本書執筆に際しては、多數參考書を利用したが、就中陳榮祖「外蒙古獨立史」、コロストツエツツ「蒙古近世史」、エドワード・ダンの「外蒙古の真相」、ゲルナルの「傳記デングス汗(何れも邦譯名)、カルリニコフの「外蒙人民共和國」ヤ・ルイデクの「外蒙の現状」、レヴィンの「蒙古」、善隣協會編の「蒙古大觀」、後藤富男の「蒙古政治史」等による處が多く、赤軍に關する部分は三島康夫前著「外蒙赤軍の全貌」等に據つたが、猶ほ新しい資料に據つてこれに幾多の修正を加へた。一九三九年度の「新資料」を以て全般的に補正し得たのは著者等の喜びとするところである。」と(傍註紹介者)。又筆者は共に善隣協會の錚々たる方々であるので、本書が戦時の物資不足から粗紙を用ひ、假綴の儘市場に出て居るとは云へ、決して拙速主義出版物と同列に置かるべきものでなく、内容は讀者の多方面な要求を充すものと思ふ。はしがきに「極東の情勢に大なる變化が生じて、本書の企圖するその基本資料的意義は來るべき數年の間滅殺されることはないであらう。渺たる小冊子ではあるが今後における我國の正しき對蒙政策の樹立に寄與するところがあれば幸ひである……」とあるのにも著者の意圖と自信が伺はれる。次に目次の大綱を掲げてこの紹介を終る。

第一章 危ない哉外蒙古